

---

# メモリーズ

未来

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メモリーズ

### 【Nコード】

N6838Z

### 【作者名】

未来

### 【あらすじ】

冬・春・夏・秋のオムニバス形式でお送りいたします。



とヒトのハーフである敵に立ち向かう感動的なシーンも今は全く頭に入っていない。ピクリとも動かない携帯ばかりが気になる。

10分が経った。僕はもしかやメールが送られていなかったのではないかと、送信BOXを確認した。しつかりと10分前に送られたメールが残っていた。

15分が経ったその時、ついに僕の携帯が鳴った。審判の時、来たる。単純明快。答えはYesかNO。メールを開いた僕を待っているのは天国か地獄。さあ、どっちなんだい。やばい。緊張でテンションがおかしくなってきたぞ。僕は座布団の上に正座し、深呼吸を3度繰り返し精神集中した。いざ！僕は決心し、携帯を開いた。

「マジかつ！！！！！！」

思わず叫んだ。隣の部屋の住民から壁を叩かれた。メールは母親からだった。

20分が経つ。僕は焦りが隠せない。なんであんなメールを送ったのだろうと後悔が募る。仲のいい先輩と後輩のままでよかったではないか。なぜもっと近づきたいと欲を出したのだ。四畳半の中心で20歳の男が身をよじる。

25分が経った。僕はある名言を思い出した。果報は寝て待て。僕は寝ることにした。押し入れから布団を取り出し、その上に横たわったその時、携帯が鳴った。僕は荒れる心を必死におさめ、携帯を開きメールの差出人を確認する。彼女からだった。

「MAJIかつ！！！！」

またもや叫んだ。そして隣の部屋からの壁ドン。溢れる。携帯を握る右手から次々と手汗があふれ出る。僕はおそろおそろそのメールを開いた。

【2011・4月】

// // // // // // // // // // // // // // //  
// // // // // // // // // // // // // // //

／／／／／／／／／／／／／／／／

「あつついね。私のガリガリくんが夏に食べられちゃうよ」

連日の真夏日。僕らの街は、フェーン風の影響でお盆の時期から日によっては40度近くまで気温が上がる。隣を歩くひかりは、先ほど立ち寄ったローソンで買ったガリガリくんを溶けないうちにと必死に食べている。

「もう夕方だつて言うのにね」

日は沈んだがまだまだ空は明るい。腕時計を見ると7時10分をさしていた。

「ああつ！！オーマイガツ」

夏にひかりのガリガリくんが奪われた。溶け落ちたガリガリくんは真夏のアスファルトにじわじわとシミをつくっていく。

「夏のバカヤロー！お前なんか大嫌いだあ！！」

ひかりは雲ひとつない夏空に叫んだ。

「そんなに怒るなよ。夏だつて悪気があつてひかりのガリガリくんを取ったわけじゃないだろ」

「うう、夏をかばうんだつたら、未来くんが代わりに私のガリガリくん弁償してよ」

ひかりはアイスの溶け落ちた棒を僕に突き付けた。そして、大好きなガリガリくんの仇をかばう僕をうらめしそうに睨んできた。

「いいよ」

僕は言う。

「えっ？ホントに？やったー！未来くん太っ腹」

先ほどまでのふくれっ面とアスファルトに食べられたガリガリくんのことをひかりは一瞬で忘れた。

「ほら」

僕はひかりのもつガリガリくんの棒を指差す。そこには『当たり前』と記されていた。

「あつ」

【2011年8月】

/  
/  
/ /

「ねえ、未来くん。秋と言ったらなんだと思う」

大学の屋上で、ひかりは僕に尋ねた。僕は頭上を覆うつろこ雲を眺めながら答える。

「んー、スポーツの秋かな。こんなにいい天気だと体を動かしたくなる」

「ちつつち、まだまだ甘いな。君は」

急に偉そうだ。

「はいはい、じゃあ答えは何？」

ひかりは渾身のドヤ顔で僕に言う。

「秋といったらお団子の秋でしょ！茶屋街にお団子食べに行こう  
僕の手をつかんでひかりは歩き出す。

「え？今から？ひかり、3限あるんじゃないの？」

「未来くんあの有名なことわざを知らないの？」

「ことわざ？」

ひかりはまたもやドヤ顔で僕に告げる。

「秋晴れの日のお団子は3限よりも尊し。byあたし！」

目から鱗だった。

【2011年10月】

/  
/  
/ /



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6838z/>

---

メモリーズ

2011年12月22日23時53分発行